

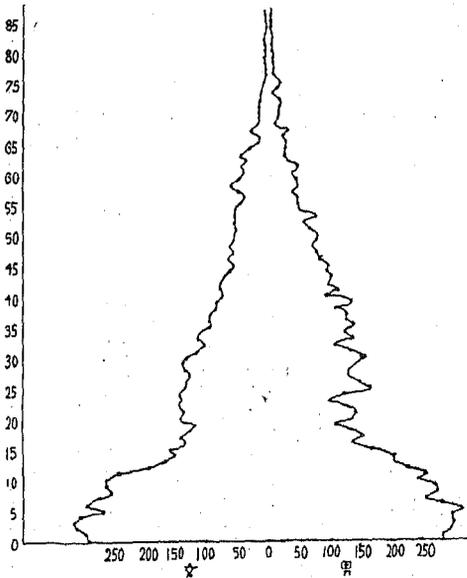
石狩炭田に於ける炭礦聚落構成 (二)

山口 彌一郎

(三)炭礦町の形態

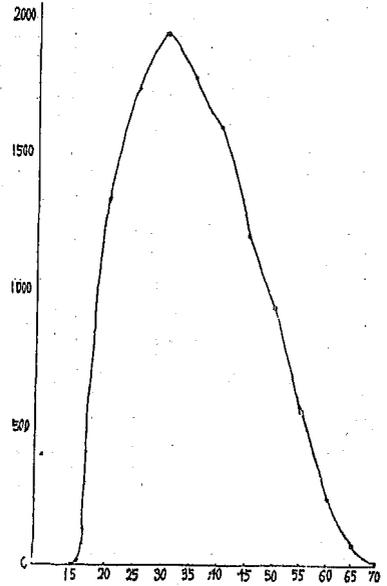
石狩山地を東西に切る横谷の西端石狩平野に門戸を有し、夫々略々東の谷奥に採炭會社が設立され續いて炭礦町が細長い谷底聚落を造る事は當炭田聚落の一般型とも見るべき事である。礦業が主として山地に行はれる關係上礦山聚落が谷底聚落として細長く發達することはむしろ通性であるが當炭田の如く山地も相當高く、壯年のに解析が進んでゐる地形的制約の強い所ではそれ等が最も標式的に表はれる。運炭の鐵道線路を

第二圖



歌志内村に於ける年齢構成
昭和五年度 男八八一八 女八三一九

第三圖



北海道炭礦汽船會社礦夫年齡構成
(昭和五・六・三一)

敷設せねばならないから谷底が略々その爲めに占有され、山麓に階段聚落を造るか、狭い段丘を利用し或は線路に沿ふて片側聚落等を造るのも見られる。

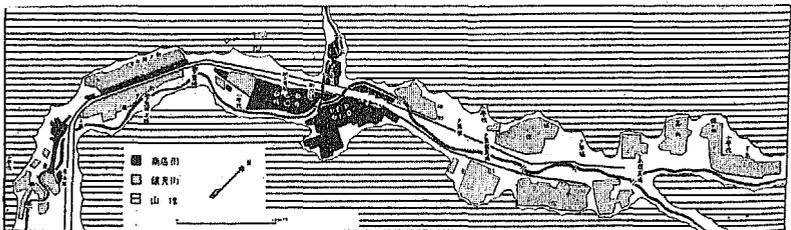
商店も老商は少なく日用品を雜多に集めた余が先に常磐炭田に於て炭礦の入口町の特色として指摘した様なものも多く、如何にも炭礦町氣分を味はせるものがある。以下標式的な炭礦聚落の二、三に就いて詳述してみよう。

石狩炭田に於ける炭礦聚落構成

(イ)夕張町

夕張町に含まれる炭礦は北海道炭礦汽船會社に屬する夕張礦・新夕張礦・若菜邊礦・眞谷地礦・登川礦と三菱に屬する大夕張礦で年約二、〇

第四圖



標式的炭礦聚落夕張町占居狀況

○○、○○噸の出炭量を有し、戸數一〇、〇〇〇人口五〇、〇〇〇人内約八割八、〇〇〇戸は純炭礦關係で全く炭礦に依つてのみ支へられる所謂炭礦町の標式的なものである。石狩平野の東南隅馬追山地を隔て、一大向斜軸を兼ねた南北に走る角田斷層を含む角田盆地があり、岩見澤を南に走つた室蘭線は栗山・由仁・追分と地形上當盆地に誘ひ込まれてゐる。その東部にさらに紅葉山山脈を隔て、角田盆地に平行して北志幌加別川より夕張川に連なる南北の谷があり、さらにまた一高原を西に越えて南流して來たシュエーパロ川がある。この高原こそ夕張炭田を含むもので東西に横ぎる志幌加別川上流・夕張川本流・バンケマヤ川・クルキ川等に夫々夕張礦・大夕張礦・眞谷地礦・登川礦等を含み、夕張川に沿ふ夕張線がそれらを統制して追分に至つて室蘭線に連なる。

最初の炭礦はライマン氏の地質調査後北海道廳技師坂市太郎氏明治二年の秋幌内より炭層の走向を逐ひ山谷を踰えて夕張に入り志幌加別

の上流に沿ふて下り、初めて今の夕張町に出で、炭層の累々として谿間に露出して居るのを發見し、再三の調査の結果明治二年四月村田堤氏其一部の試掘許可を得同年一月北海道鐵道會社之を讓受け、二三年六月開坑した夕張礦である。下部第三紀層の下層群に屬する約四尺の上層、内に五寸乃至三尺の夾雜物二枚を有する二四尺の本層及び下層の約四尺が稼行中の炭層である。

明治二三年開坑に着手すると第一區より第四區附近は礦業用地であつたにも拘らず機敏な商人入り來り、現在の夕張停車場附近より社宅方面の通路に接した小段上に荊棘を刈り開き約一〇〇余名の礦夫を相手とする雜穀・雜貨・荒物等の日用品を並べた笹小屋の商店が數戸建ち炭礦町の發生を見た。漸次増加して礦業用地・鐵道用地の區別なく無願の聚落が發展して來たので會社は礦山地域内に一戸分四間に七間又は四間に一〇間等の區劃をし貸付を行つた。同二五年會社私設夕張線開通と共に礦夫・勞働者・商人等

急に増集し所謂炭礦町の發生氣分とも言ふべき景觀を呈し、殆んど第一區より四區迄は街衢をなした。

明治三五年六月七日恰も強烈な風と融雪後の乾燥季に火事が起り四七四戸を烏有に歸せしめた。こゝに於て現在の第五區方面に發展が延び炭礦會社より礦業用地域返納等あり更めて市街區劃を了へ現在の夕張町の大形が出来上つた。

現在夕張礦に屬する礦夫・役員の凡てを含む純炭礦關係の戸數は三、〇三二戸(昭和五年一月)あり、夫々谷與より丁未(四〇七戸)錦岡(二〇八戸)富岡(八九戸)福住(四一〇戸)住初(一三四戸)高松(一、〇一四戸)社光(七六〇戸)東山(九戸)に分れ志幌加別川の山麓斜面に長屋式階段聚落を造つて占居してゐる。深い谷底には急流が走りその兩岸の小段丘を結んで鐵道が通じ撰炭場・積込場の如き直接炭礦關係の聚落をつくつてゐる。依つて礦夫住宅は土地が狭いため谷の斜面を利用するに至つた。商店街は北より來るポンホロカベツ川の合する三叉境附近で第

一區(一三五戸)第二區(八〇五戸)第三區(二一七戸)第四區(一六四戸)第五區(二〇八戸)旭町(三二六戸)が殆んど總て間接的に炭礦に支へられてゐる。尙ほその西に接して第六區(三四二戸)新夕張(一、〇二〇戸)がほゞ礦夫聚落で夕張關係と共に先の第一區より第五區迄の人口を支へる事になる。

夕張礦には礦夫三、〇五八人(昭和五年)あり一〇、〇一二人の家族即ち(礦夫に對して約三・三人の家族を容してゐる事になる。戸數に於ても第一區より第五區迄及び旭町を合して略々間接的炭礦聚落の商店街と見做し一、一三〇戸が直接的炭礦聚落の礦夫戸數四、三九三戸に依つて支へられ、新夕張・鹿ノ谷を併せた志幌加別川の谷を一生活單元と見做せば約六、二〇〇の礦夫の生産人口に對して約二四、〇〇〇人の消費人口が支へられ、一礦夫當り約四人の非生産人口がある事になる。

夕張町の第一區より第五區迄は前述の如く純消費都市とも言ふべく、その商店を見るに嘗て

余が常磐炭田に於て炭礦入口町と假稱せるに似雜貨・飲食物を一黨に羅列した萬店と言ふ如きものが殊に多く目立つ。第一區の鐵道線路に沿ふ片側町A・B、第二區・第三區の主要なるG

通り、第四區・第五區の主要なるD通りの店舗の種類別調査を行つた處によると、萬店（先づ雜貨類・菓子・酒類・罐詰類を一黨に並べたものに就いて假稱する。多く一隅に野菜・果物の一部を置く）は約一七%の三六軒・菓子屋・飲食店夫々全じく一六軒・呉服店・洋品店・夫々一一軒・履物店一〇軒・理髮店・時計店夫々七軒、文房具店六軒、金物店五軒、旅館四軒その他八〇軒の割合になる。この他C通りは殆んど料理屋兼私娼街で、夕張町として藝娼妓に類するもの計二六三名が統計に表れてゐる。旅館が新夕張驛前のE通りに數軒あるから推察は稍不備である。勿論これ等の店舗種類調査が量的に炭礦町としての特色を描き出す事は困難でもあらうが、純農村の核心聚落や漁村或は工場町の核心聚落の店舗種類調査と比較して如何なる關係がある

かを見出す事は將來重要な一方面であらう。炭礦聚落としての常磐・石狩・筑豊等に或る共通點が見出されはしまいか。先づ概報して置く次第である。

第一區は夕張炭礦夫聚落に接續する最も東の商店街で數條の鐵道線路が谷底の細長い平地を占有する爲め双方片側町となつてゐる。店舗の種類より見るも最も炭礦町的で線路側道路に露天商が並んでゐる。余の調査した昭和六年八月二一日にはB通りに二五軒見られた。凡て店幅二間で菓子類のもの八、飲食物六、洋品五、古本三、玩具類二、古着一の種類があつた。緣日等の露天商に比して飲食物（あげもの・ちでん等）の多いのが特色であると思はれる。

炭礦聚落の經濟關係を研究するに注意しなければならぬのは之等店舗の研究及び各炭礦事務所で行つてゐる日用品販賣で、現在料理店・質店・古物商・魚菜商に屬するものを除く殆んど總てが供給されてゐる。それ等の研究は會社經營の利益事業で調査を進める事は困難で將來に

待つ外ない。

志幌加別川より夕張川に連なる南北の谷は東部高原の横谷に發達した炭礦を統制する交通路で若鍋・清水澤・沼ノ澤・紅葉山各驛があり夫々支線を合せてゐる。約一、二〇〇戸の内四七〇戸の農業戸數を含み夕張町唯一の農業地帯で二、〇〇〇町歩の畑がある。炭礦町に供給する蔬菜の産額が最も多く、馬鈴薯がそれに次いでゐる。

夕張礦の石炭を小樽港方面へ搬出の目的で夕張鐵道が開通してより夕張礦・新夕張礦・若菜邊礦の石炭が北の門戸も開け、總じて約八、七〇〇人の採掘する二、〇〇〇、〇〇〇噸の石炭に依つて一〇、〇〇〇戸五〇、〇〇〇人の人口を含む夕張町がこの夕張山地の谷聚落として異常なる聚落景觀をもち、二四尺の大炭層を主とする六五〇、〇〇〇、〇〇〇噸の炭量採掘に向つて將來の發展に進んでゐる理である。

(ロ) 幌内炭礦聚落

幌内炭坑は石狩炭田最初の開坑地として小樽

石狩炭田に於ける炭礦聚落構成

港より五六哩の距離にあり、炭田中海港に通ずる最短距離で手宮・幌内間の鐵道は明治一五年既に開通し、同一六年より採炭を行つたものである。聚落の占居狀況並びに型態は幾春別の炭礦聚落とよく似、幾春別川及び幌内川の谷奥が夫々二股に分れる所に採炭に直接關係する坑道撰炭場・積込場等が出來、谷底に鐵道が走り、川の合流する西の段丘上に計劃的な方形の地割による商店をもつ炭礦町が發達してゐる。幌内市街地は現在戸數約三〇〇人口一、四〇〇を容してゐる。直接炭礦に働く人口約一、一〇〇人及び約その三倍の家族を相手にこの市街が形成されてゐる。段丘上の外は地形的制約により礦夫聚落が谷の斜面地に階段狀に發達し、停車場通りには片側町が發生してゐる。他の側は崖になり、崖下に鐵道が通じ、鐵道關係や、礦夫聚落の若干がある。店舗の種類は夕張町に似て日用雜貨・菓子店等が目立つ。

昭和五年五月大火あり、臺地上の商店街が殆んど全焼した。現在は略復活したが、炭礦の發

生に連れて蝸集した人口が無秩序にバラツク式の家屋を立てたのが火事に際しては非常に不利で、大火に依つて聚落の分散と、統制された市街の發達が見られる様に思はれる。

(ハ)歌 志 内 村

歌志内村はペンケ川に沿ふて約二〇軒に亘る完全な一つの谷聚落である。空知礦・上歌志内礦・歌志内礦・新歌志内礦(但しこれはペンケ川上流にあり砂川礦と共に聯續した谷聚落をつくつてゐる)がこの村の地域に含まれてゐる。戸數四、八三六(昭和五年)中純炭礦關係戸數は七七%の三、七〇五で農業戸數七四工業戸數四〇商業戸數四五一、一般労働者戸數二一八、一般俸給者戸數一六九、その他一七九戸がその種類別である。農工業戸數に比して商業戸數が多く且つ一般労働者戸數の多いのが炭礦聚落としての特徴とみられる。

總人口一七、一三一で内男が八、八一〇女が八、三二〇女一〇〇に對する男は一〇六で男の數の多い事が知られる。男の一般に多いのは石

狩炭田一般に見られる現象で女礦夫を使用しない事、男の獨人礦夫が多數入り込んでゐる事、移住地的特性等がその原因とみられる。一戸當り人口も三・五の小數で全村の殆んどが礦夫住宅の小家族的である事が知られる。村役場の調査によると一戸當りの間數が二・一〇で如何に炭礦町らしい景觀のあるかと窺はれる。

歌志内驛前の二列の街村八八戸に就いて職業別調査を試みた所によると(昭和六年八月十九日)雜貨・菓子・野菜類の萬店は一八%の一六戸で割合は夕張町に於ける調査の結果と近似値にある。次位が同じく飲食店八菓子店七で呉服店洋品店の夫々四戸がそれに次いでゐ、何等か炭礦町としての店舗構成に或る型が見出される様に思へる。將來本邦の炭礦聚落を一通り調査終了してから研究をまとめてみたいと思ふ。

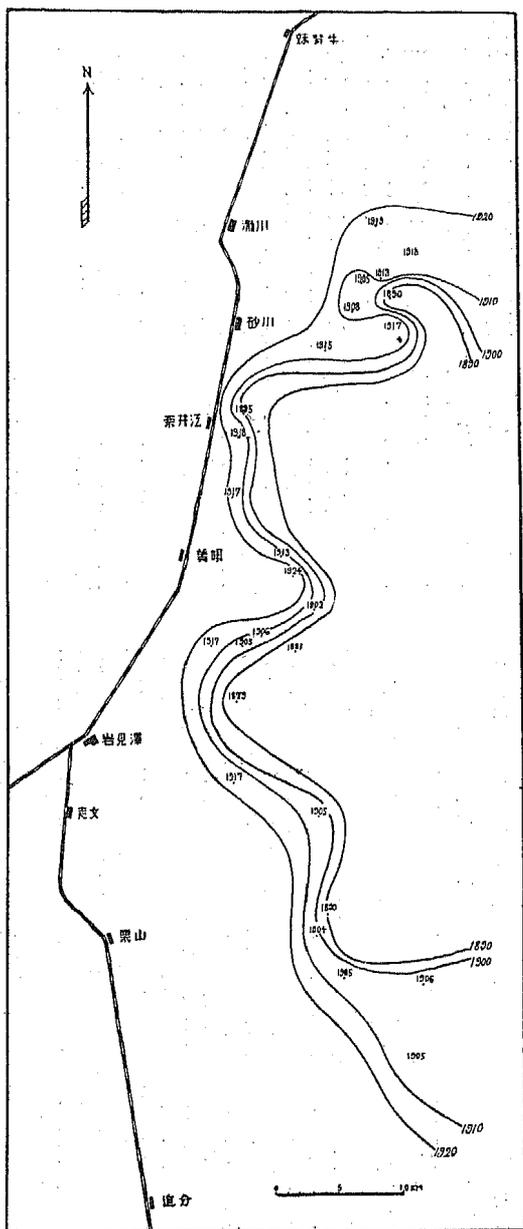
(四)西 漸 性

余は嘗て常磐炭田に於ては阿武隈山地より東部海岸地方に漸次上層が出現して來、炭層が走向南北に近く、東方に向つて一〇度以下の傾斜

をもつ所から、炭礦が阿武隈山麓に近い露頭附近に起り漸次東方に移り、従つて炭礦聚落も東漸性のある事を指摘した。石狩炭田に於ては地質構造が全く異なり、皺曲を受けた炭層が多く、逆斷層を受けて複雑し、一律に炭層の走向、

傾斜を推論する事は困難である。然し南日高より北宗谷に貫いてゐる夕張山脈の大皺曲軸を中樞として漸次西に白堊紀層、第三紀層の下部・中部・上部各層、第四紀層の表れてゐる所によれば、その間複雑な構造があるに

第五圖 石狩炭田に於ける炭礦の西漸性圖



石狩炭田に於ける炭礦聚落構成

せよ、炭層が西に移るに従つて深くなつてゐる結果となる。

當炭田の採炭状況を見るに未だ幼年期より漸く壯年期に達した階程である。それで最初起つた炭礦の一つすら衰頹の著しいのを見ない。果して炭礦聚落が或る移動方向をもつやの觀察は困難な事である。たゞ現在石狩炭田にある二〇餘の炭礦の開坑紀元年數を記入して等時線を引いてみた所によると、稍々西漸性のある事を窺ひ得た。炭礦聚落も果して西漸するや否やの問題は將來に待つより外ない。地形的制約、交通路の西部に門戸を開いてゐる事、炭礦聚落が石狩山地の横谷の東端に谷聚落として殆んど谷斜面を満してゐる所をみると、將來發展するに従つて恐らくは西漸性の課程を踏むであらうと思はれる。

(五) 結 論

炭田の機能は或る大資本に依つて純營利的に開發され、可及的短日月に採掘を完了し、廢坑解體する人爲的統制に依つてゐる。而して炭層

の走向、傾斜等に依つて炭礦移動を來し、炭礦聚落はそれに附隨して起る特異景觀であつて、聚落形態、人口構成に夫々特色をもつてゐる。就中石狩炭田に於ては常磐炭田に於ける如き炭礦聚落の發達をみる以前既に地方的聚落があり後生的沒交渉に起つた炭礦聚落に影響させられる事はなく、最初より純炭礦聚落として起り、むしろ他の聚落が炭礦聚落に調和追從して發達してゐる。又それだけ純炭礦聚落とも言ひ得る理で、常磐炭田に於ける炭礦聚落と比較しても幾多の共通點と特異性がみられる理である。

終りに參照した多くの文獻の著者及び資料蒐集に御助力下された各官衙、會社等に厚く感謝すると共に特に御指導を賜つた北海道帝大教授高岡熊雄博士、東北帝大講師田中館秀三學士、北海道炭礦汽船會社技師村田析學士並びに調査中偶然車中でお會ひし御助言を賜つた徳永重康博士に厚く感謝の意を表す。(昭和七年三月)

主なる文獻

大井上義近 夕張郡地質調査報文 明治四〇年八月

北海道石狩國空知郡煤田地質調査報文

明治四五年一月

今井半次郎 石狩炭田に於ける夾炭第三紀層(石狩統)の層位地質學的研究 地學雜誌 大正一三年
村田 析 社友別冊見やすき爲めに 昭和五年八月

参照せる主なる論文

夕張地方の地質學的觀察

夕張炭田の地質的觀察

石狩炭田の炭層狀態に就て

幌內層の研究

栗山地方の地質

北海道石炭礦業會 北海道石炭礦業誌 昭和三年九月
小樽商學學校 北海道石炭業概論 大正五年六月
鐵道省運輸局 石炭礦炭石油に關する調査 昭和二年
十一月

可野 信一 樺太の石炭礦業と殖民 日本鐵業會誌 昭和六年七月

小國 樞城 夕張發達史 大正四年一二月

山口彌一郎 常磐炭田に於ける炭礦聚落構成 地學雜誌 昭和六年一月

地名の地理學的考察とその一例 (六)

小林 悟 一郎

i ウチ

之も山と山とに抱かれた所即ち谷をよぶ古來からの言葉であることは周知である。カウチなど多いものである。それで谷地をよぶウチとして地形詞の部に入れたのである。併し内外のウ

チと別ち難いまでに使ひならされて居り、又それと原義に變りはないので一緒にした。總數は四十で、その中山地部に屬すべきものは二十四である。平地部のものの中栗ノ内土居内(三)開ノ内(神)内開・内野(瀦)陣ノ内(井)等は内外の